

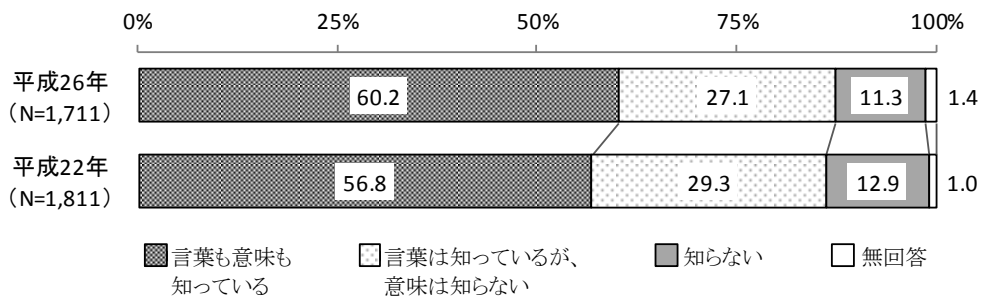
第2章 食育・地産地消

2-1 「食育」の認知と関心

(1) 食育の認知

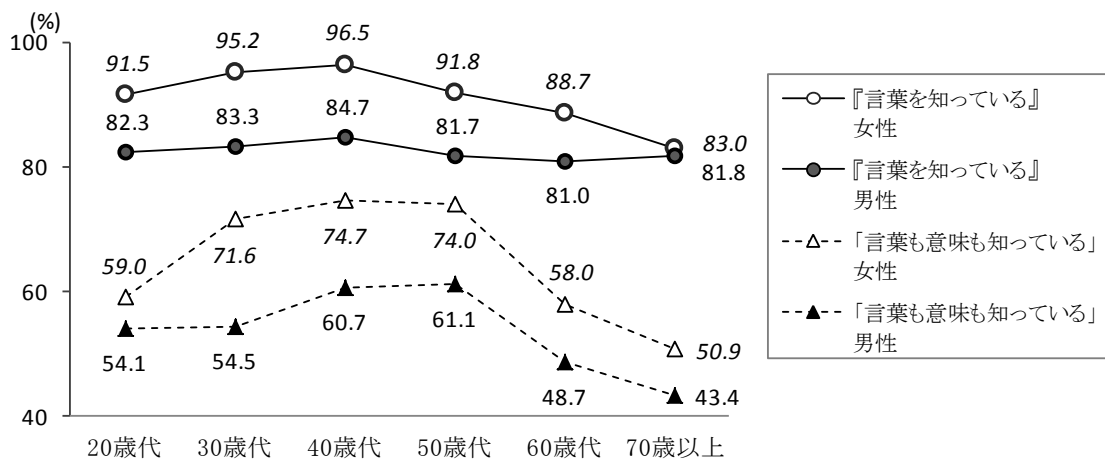
「食育」の言葉も意味も知っている人は約6割。
言葉も意味も知っている人は女性で65.5%、男性より11.6ポイント高い。

問11 あなたは、「食育」という言葉やその意味を知っていますか。(あてはまる番号に1つだけ○印)



■図2-1 性別・年齢別にみた「食育」の認知度

◇「言葉も意味も知っている」割合は30～50歳代の女性で7割を超えて高く、特に30歳代では男性との差が17.1ポイントと大きい。



◆属性別特徴

【性別】「言葉も意味も知っている」割合は女性 65.5%に対して男性 53.9%と、女性の方が 11.6 ポイント高い。

【年齢別】「言葉も意味も知っている」は 40 歳代と 50 歳代で約 7 割と高く、一方で 70 歳以上では 5 割に満たない。

【ブロック別】「言葉も意味も知っている」は中央東部で約 7 割と最も高く、西部 B で 5 割と最も低い。

【子どもの状況別】「言葉も意味も知っている」割合は子どもがいる世帯では 7 割前後と高い。

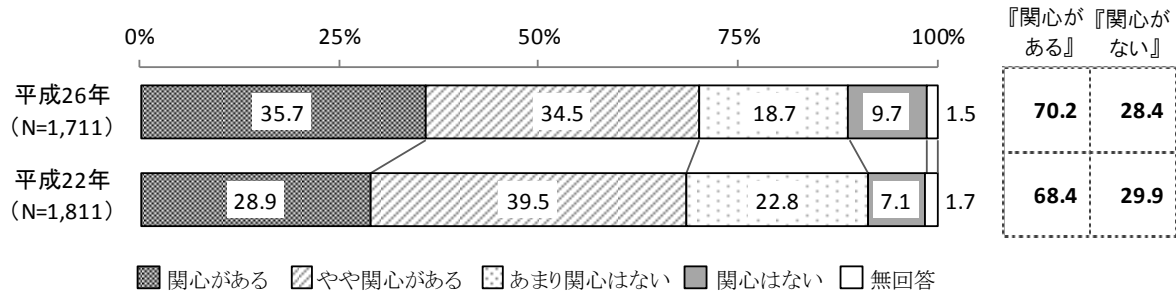
		標 本 数 (票)	「食育」の認知度 (%)			
			知 言 っ 葉 て も い 意 る 味 も	は い 言 知 る 葉 ら が は な 、 知 い 意 味 て	知 ら な い	無 回 答
全 体 (カッコ内は標本数)		100.0 (1,711)	60.2 (1,030)	27.1 (464)	11.3 (193)	1.4 (24)
性 別	男性	786	53.9	28.5	16.7	0.9
	女性	925	65.5	25.9	6.7	1.8
年 齢 別	20歳代	202	56.9	30.7	11.9	0.5
	30歳代	280	63.6	26.1	10.0	0.4
	40歳代	324	68.2	22.8	8.0	0.9
	50歳代	300	68.3	19.0	11.7	1.0
	60歳代	394	53.6	31.5	12.9	2.0
	70歳以上	211	47.4	35.1	13.7	3.8
ブ ロ ッ ク 別	東部A	122	61.5	23.8	13.9	0.8
	東部B(田主丸)	109	56.0	30.3	11.0	2.8
	北部A	156	63.5	22.4	12.8	1.3
	北部B(北野)	107	57.0	34.6	8.4	－
	中央東部	210	68.1	21.0	9.5	1.4
	南東部	176	60.8	28.4	10.2	0.6
	中央部	229	62.4	23.1	12.2	2.2
	中央南部	293	57.7	27.0	12.6	2.7
	南西部	145	56.6	35.2	8.3	－
	西部A(城島)	68	61.8	25.0	13.2	－
子 ど も の 状 況 別	西部B(三潴)	96	50.0	37.5	11.5	1.0
	世帯の中に就学前の子どもがいる	236	69.5	26.3	3.0	1.3
	世帯の中に小学生がいる	233	73.0	21.5	4.3	1.3
	世帯の中に中学生がいる	150	72.7	20.7	5.3	1.3
	世帯の中に上記以外の18歳未満の子どもがいる	182	70.3	18.1	9.9	1.6
	上記にあてはまる人はいない	1,147	55.9	28.9	13.7	1.5
	無回答	6	33.3	33.3	33.3	－



(2) 食育の関心度

「食育」に関心がある人は、前回調査より増え、7割を超えた。
女性の関心度は78.3%で男性より17.7ポイント高い。

問12 あなたは、「食育」に関心がありますか。(あてはまる番号に1つだけ○印)



◆ 属性別特徴

【性別】「関心がある」と「やや関心がある」を合わせた『関心がある』割合は、女性 78.3%に対して男性は 60.6%と17.7ポイントの差がある。

【年齢別】『関心がある』は30～60歳代で7割を超えているが、20歳代では63.4%とやや低い。

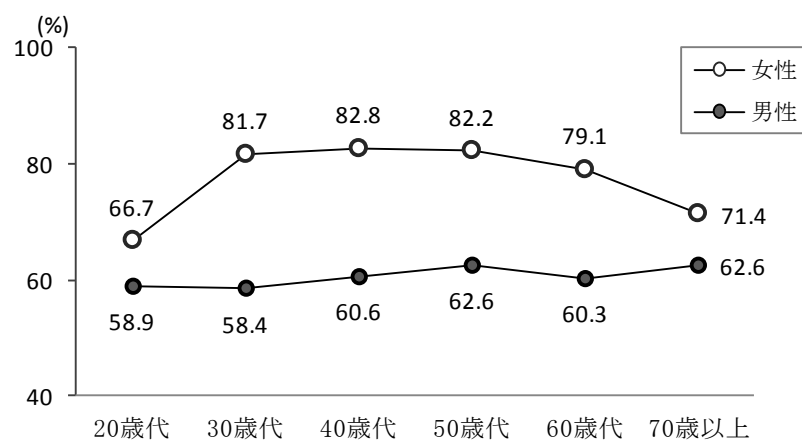
【ブロック別】関心度は認知度同様、中央東部で最も高く、西部Bで低い。

【子どもの状況別】年齢が低い子どもがいる世帯ほど食育への関心度は高く、就学前の子どもがいる世帯では8割を超えている。

		標本数 (票)	「食育」への関心度 (%)					『関心がある』	『関心がない』
			関心がある	やや関心がある	あまり関心はない	関心はない	無回答		
全 体 (カッコ内は標本数)		100.0 (1,711)	35.7 (610)	34.5 (590)	18.7 (320)	9.7 (166)	1.5 (25)	70.2 (1,200)	28.4 (486)
性 別	男性	786	27.9	32.7	23.9	14.4	1.1	60.6	38.3
	女性	925	42.3	36.0	14.3	5.7	1.7	78.3	20.0
年 齢 別	20歳代	202	30.2	33.2	23.8	12.4	0.5	63.4	36.2
	30歳代	280	37.9	32.9	19.3	8.9	1.1	70.8	28.2
	40歳代	324	34.9	37.7	19.4	7.4	0.6	72.6	26.8
	50歳代	300	35.7	38.0	15.3	10.3	0.7	73.7	25.6
	60歳代	394	37.8	32.2	18.0	9.6	2.3	70.0	27.6
	70歳以上	211	35.1	32.2	18.0	10.9	3.8	67.3	28.9
ブ ロ ッ ク 別	東部A	122	36.1	30.3	22.1	10.7	0.8	66.4	32.8
	東部B(田主丸)	109	30.3	37.6	20.2	10.1	1.8	67.9	30.3
	北部A	156	37.8	28.8	20.5	9.6	3.2	66.6	30.1
	北部B(北野)	107	34.6	39.3	16.8	9.3	-	73.9	26.1
	中央東部	210	38.6	36.7	14.3	9.0	1.4	75.3	23.3
	南東部	176	39.8	28.4	20.5	10.2	1.1	68.2	30.7
	中央部	229	35.4	34.5	17.5	10.9	1.7	69.9	28.4
	中央南部	293	32.1	38.2	15.4	11.9	2.4	70.3	27.3
	南西部	145	37.9	35.2	20.0	6.9	-	73.1	26.9
	西部A(城島)	68	36.8	36.8	20.6	5.9	-	73.6	26.5
	西部B(三潁)	96	32.3	32.3	28.1	6.3	1.0	64.6	34.4
子 ども の 状 況 別	世帯の中に就学前の子どもがいる	236	49.2	33.9	11.9	3.0	2.1	83.1	14.9
	世帯の中に小学生がいる	233	42.9	34.8	17.2	3.4	1.7	77.7	20.6
	世帯の中に中学生がいる	150	33.3	43.3	16.0	6.7	0.7	76.6	22.7
	世帯の中に上記以外の18歳未満の子どもがいる	182	34.1	36.8	18.7	9.3	1.1	70.9	28.0
	上記にあてはまる人はいない	1,147	33.0	33.9	20.4	11.2	1.4	66.9	31.6
無回答		6	16.7	16.7	-	66.7	-	33.4	66.7

■図2－2 性別・年齢別にみた「食育」への関心度

- ◇ 30 歳代から 60 歳代の女性で関心度が8割前後と高い。
- ◇ いずれの年代も女性の関心度が高く、特に 30・40 歳代では 20 ポイント以上とその差が大きい。



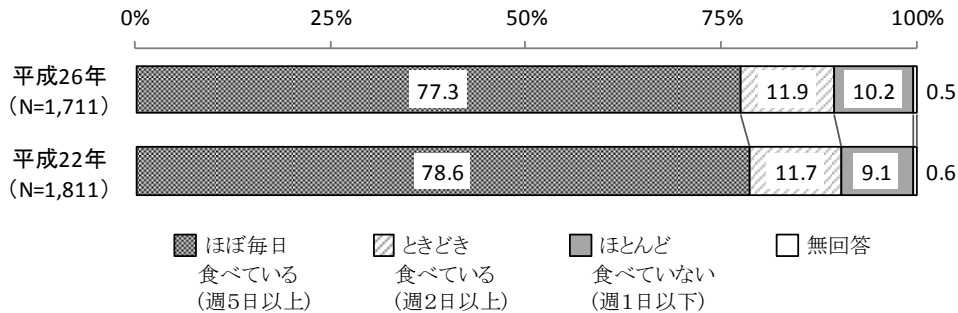


2-2 朝食の摂取状況

朝食を「ほぼ毎日食べている」が約8割。一方「食べていない」は約1割。

問13 朝食についておたずねします。

(ア) あなたは、朝食をとっていますか。(あてはまる番号に1つだけ○印)



◆属性別特徴

【性別】「ほぼ毎日食べている(週5日以上)」割合は男性より女性の方が5.4ポイント高い。

【年齢別】

・「ほぼ毎日食べている」は年齢が上がるほど高くなる傾向にあり、70歳以上では9割を超えている。また、20歳代は「ときどき食べている」が2割以上みられる。

・30歳代と40歳代は「ほぼ毎日食べている」で10ポイント以上の差がある。

【ブロック別】「ほぼ毎日食べている」割合は東部Bと中央東部、南西部で8割を超えて高く、中央南部で72.7%と最も低い。

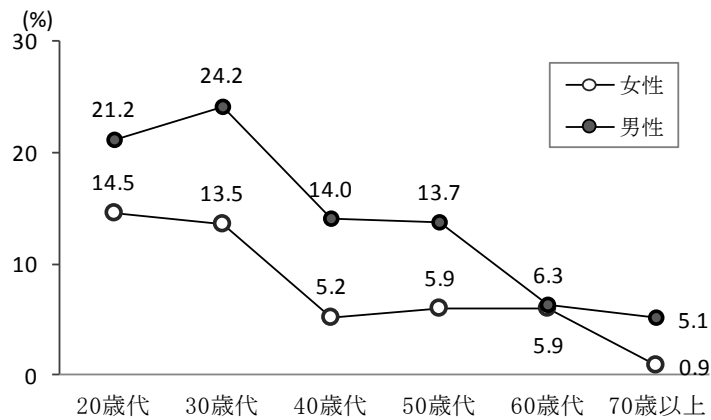
【子どもの状況別】「ほぼ毎日食べている」割合は小学生や中学生がいる世帯で8割を超えている。

【住居形態別】「ほぼ毎日食べている」割合は賃貸住宅、勤務先給与住宅で6割台、間借り・同居では5割と低い。

	標本数 (票)	朝食の状況 (%)					標本数 (票)	朝食の状況 (%)			
		(ほぼ毎日 食べている 週5日以上)	(ほぼ毎日 食べている 週2日以上)	(ほぼ毎日 食べている 週1日以下)	無回答			(ほぼ毎日 食べている 週5日以上)	(ほぼ毎日 食べている 週2日以上)	(ほぼ毎日 食べている 週1日以下)	無回答
全体 (カッコ内は標本数)	100.0 (1,711)	77.3 (1,323)	11.9 (204)	10.2 (175)	0.5 (9)	全体 (カッコ内は標本数)	100.0 (1,711)	77.3 (1,323)	11.9 (204)	10.2 (175)	0.5 (9)
性別						子ども					
男性	786	74.4	11.7	13.5	0.4	世帯の中に就学前の子どもがいる	236	75.4	12.3	11.4	0.8
女性	925	79.8	12.1	7.5	0.6	世帯の中に小学生がいる	233	81.1	10.7	7.7	0.4
年齢別						世帯の中に中学生がいる	150	81.3	10.7	7.3	0.7
20歳代	202	58.4	23.8	17.3	0.5	世帯の中に上記以外の18歳未満の子どもがいる	182	75.3	14.8	9.3	0.5
30歳代	280	66.1	15.0	18.6	0.4	上記にあてはまる人はいない	1,147	77.2	11.8	10.6	0.4
40歳代	324	77.2	13.3	9.3	0.3	無回答	6	50.0	33.3	16.7	-
50歳代	300	77.7	12.3	9.3	0.7	住居形態別					
60歳代	394	86.8	6.3	6.1	0.8	持ち家・一戸建て	1,129	80.8	10.1	8.7	0.4
70歳以上	211	92.4	4.3	2.8	0.5	持ち家・集合住宅(分譲マンション)	73	84.9	8.2	2.7	4.1
ブロック別						借家住宅(一戸建て)	88	83.0	8.0	9.1	-
東部A	122	76.2	12.3	11.5	-	賃貸住宅(アパート、マンション)	390	66.2	17.7	15.9	0.3
東部B(田主丸)	109	83.5	4.6	11.9	-	勤務先給与住宅(公務員住宅・社宅・寮など)	19	63.2	21.1	15.8	-
北部A	156	73.7	15.4	10.3	0.6	間借り・同居、その他	12	50.0	33.3	16.7	-
北部B(北野)	107	74.8	8.4	16.8	-	無回答	-	-	-	-	-
中央東部	210	81.4	10.5	7.6	0.5						
南東部	176	79.5	11.4	8.5	0.6						
中央部	229	77.3	12.7	9.6	0.4						
中央南部	293	72.7	15.7	10.2	1.4						
南西部	145	80.7	9.7	9.7	-						
西部A(城島)	68	77.9	11.8	10.3	-						
西部B(三潴)	96	76.0	12.5	10.4	1.0						

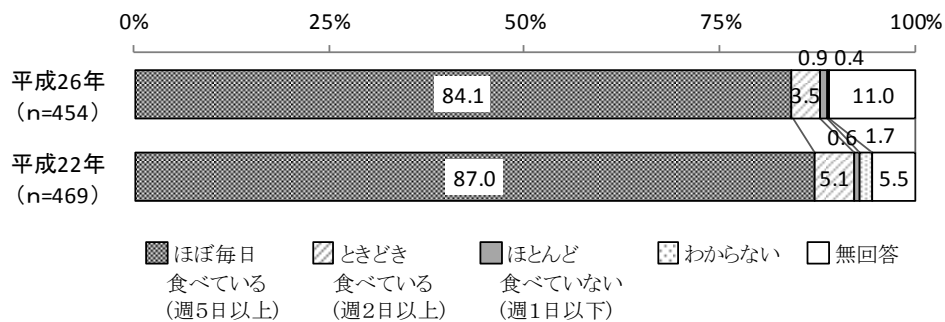
■図2－3 性別・年齢別にみた朝食を「ほとんど食べていない」割合

◇ いずれの年代も男性の割合が高く、30 歳代以下の男性では「ほとんど食べていない」人が2割を超えている。



(イ) 中学生以下のお子さんのいる家庭におたずねします。

お子さんは、朝食をとっていますか。(あてはまる番号に1つだけ○印)



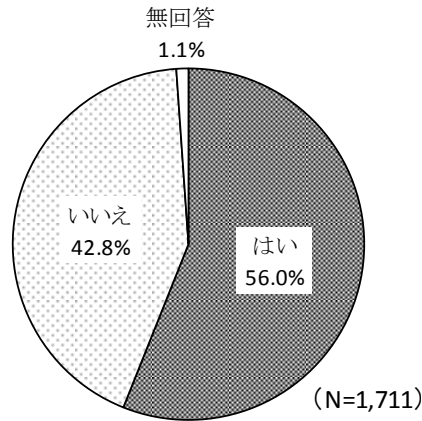
		標 本 数 (票)	朝食の状況【中学生以下の子ども】(%)				
			(週5日以上)	ほ ぼ 毎 日	(週2日以上)	食 べ て い る と き ど き	(週1日以下)
全 体 (カッコ内は標本数)		100.0 (454)	84.1 (382)	3.5 (16)	0.9 (4)	0.4 (2)	11.0 (50)
状 況 別	子どもの世帯の中に就学前の子どもがいる	236	81.4	2.5	－	0.8	15.3
	子どもの世帯の中に小学生がいる	233	91.8	4.7	1.3	－	2.1
	子どもの世帯の中に中学生がいる	150	86.0	4.7	0.7	－	8.7

2-3 がめ煮の調理

郷土料理「がめ煮」を調理できる人は56.0%。

女性は30歳以上で6割を超えるが、男性は全ての年代で4割に満たない。

問14 あなたは、郷土料理「がめ煮」を調理することができますか。(あてはまる番号に1つだけ○印)



◆属性別特徴

【性別】調理できる人は女性の8割に対して、男性は3割に満たない。

【性別・年齢別】調理できる人は男性はどの年代も2割～3割台と少ないが、女性は年齢が上がるほど多くなり60歳以上では9割半ばとなっている。

【ブロック別】中央東部では調理できる割合が67.6%と最も高いが、北部Aは5割に満たず、できない割合の方が僅かに上回っている。

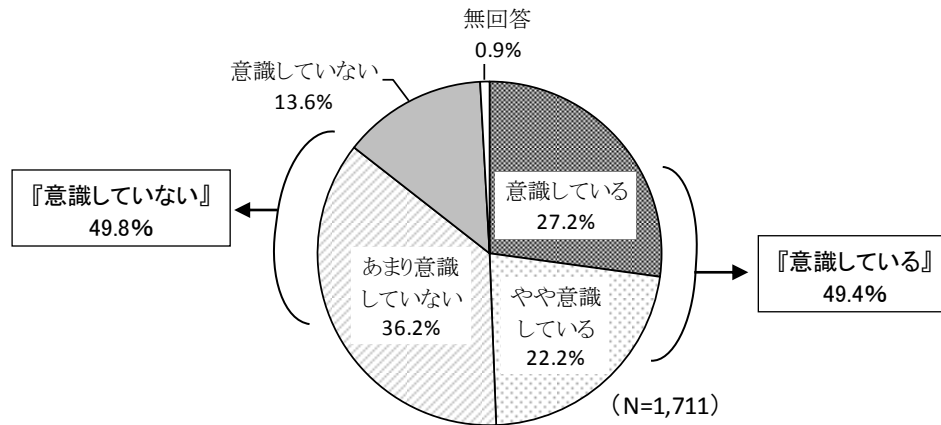
		(票) 標本 数	がめ煮を調理できるか (％)		
			はい	いいえ	無回答
全 体 (カッコ内は標本数)		100.0 (1,711)	56.0 (959)	42.8 (733)	1.1 (19)
性別	男性	786	28.4	70.2	1.4
	女性	925	79.6	19.6	0.9
性別 × 年 齢 別	男性:20歳代	85	23.5	74.1	2.4
	男性:30歳代	132	22.7	77.3	－
	男性:40歳代	150	24.0	76.0	－
	男性:50歳代	131	32.8	66.4	0.8
	男性:60歳代	189	32.3	65.1	2.6
	男性:70歳以上	99	33.3	63.6	3.0
	女性:20歳代	117	38.5	59.8	1.7
	女性:30歳代	148	68.2	31.1	0.7
	女性:40歳代	174	79.9	19.5	0.6
	女性:50歳代	169	88.8	10.7	0.6
	女性:60歳代	205	95.1	3.9	1.0
	女性:70歳以上	112	94.6	4.5	0.9
ブ ロ ッ ク 別	東部A	122	59.0	41.0	－
	東部B(田主丸)	109	51.4	48.6	－
	北部A	156	48.1	50.0	1.9
	北部B(北野)	107	60.7	39.3	－
	中央東部	210	67.6	31.4	1.0
	南東部	176	53.4	44.9	1.7
	中央部	229	51.5	47.2	1.3
	中央南部	293	53.6	44.7	1.7
	南西部	145	57.2	42.8	－
	西部A(城島)	68	57.4	39.7	2.9
西部B(三潴)	96	60.4	38.5	1.0	

２－４ 地産地消に対する意識

日常の食生活で久留米産の農産物を食べるように意識している人は約５割。
意識している割合は、年齢が上がるほど高くなる。

問 15 あなたは、日常の食生活で、久留米産の農産物を食べるように意識していますか。

(あてはまる番号に1つだけ○印)



◆属性別特徴

【性別】『意識している』割合は男性(38.7%)より女性(58.4%)の方が20ポイントほど高い。

【年齢別】『意識している』割合は20歳代で21.8%と最も低く、年齢が上がるほど割合も高くなる傾向にあり、70歳以上で67.8%と最も高い。

【ブロック別】『意識している』は東部B、中央東部、北部Bなどで5割半ばと高く、一方で、西部Bが唯一3割台と低くなっている。

		標本数 (票)	久留米産の農産物を食べるように意識しているか (%)					
			意識している	やや意識している	あまり意識していない	意識していない	無回答	
全 体 (カッコ内は標本数)		100.0 (1,711)	27.2 (465)	22.2 (380)	36.2 (619)	13.6 (232)	0.9 (15)	
性 別	男性	786	17.7	21.0	42.1	18.3	0.9	
	女性	925	35.2	23.2	31.1	9.5	0.9	
年 齢 別	20歳代	202	10.9	10.9	45.0	32.2	1.0	
	30歳代	280	17.9	21.8	41.8	18.2	0.4	
	40歳代	324	24.1	23.5	40.7	11.4	0.3	
	50歳代	300	28.7	20.3	39.3	11.0	0.7	
	60歳代	394	35.5	26.9	28.7	7.6	1.3	
	70歳以上	211	42.2	25.6	22.7	7.6	1.9	
ブ ロ ッ ク 別	東部A	122	29.5	25.4	34.4	10.7	-	
	東部B(田主丸)	109	37.6	19.3	27.5	14.7	0.9	
	北部A	156	27.6	17.9	37.2	16.0	1.3	
	北部B(北野)	107	29.9	25.2	33.6	11.2	-	
	中央東部	210	24.8	31.4	33.8	9.5	0.5	
	南東部	176	26.7	21.6	34.1	17.0	0.6	
	中央部	229	24.9	25.3	36.2	12.7	0.9	
	中央南部	293	24.6	15.7	41.0	16.7	2.0	
	南西部	145	28.3	25.5	35.9	10.3	-	
	西部A(城島)	68	30.9	20.6	36.8	10.3	1.5	
	西部B(三潴)	96	24.0	14.6	43.8	16.7	1.0	



◆属性別特徴

【久留米市への愛着の有無別】久留米市への愛着度が高い人ほど、久留米産の農産物を食べるように意識している割合が高い。

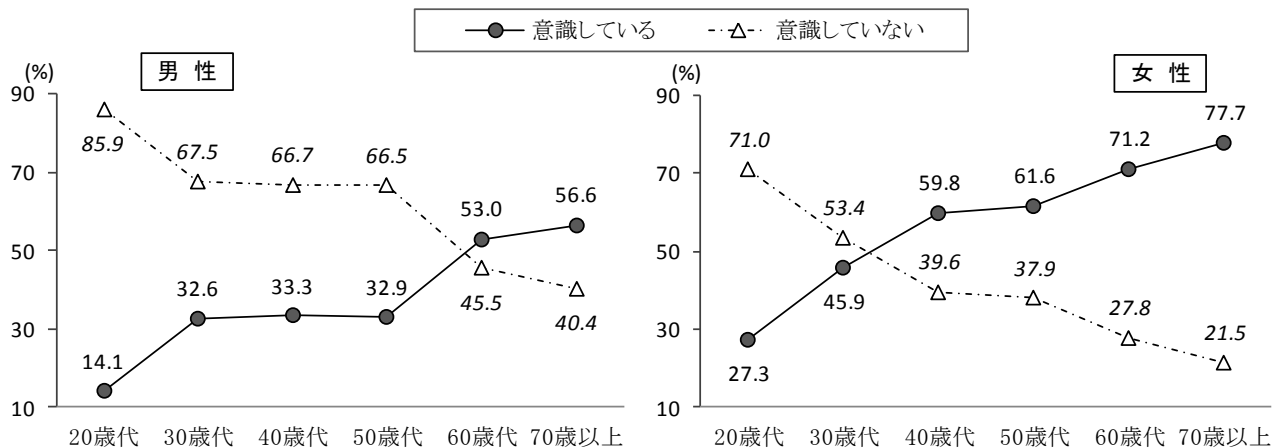
【食育への関心の有無別】食育への関心度が高い人ほど意識している割合が高く、「関心がある」人では『意識している』割合が7割に上る。

		標本数 (票)	久留米産の農産物を食べるように意識しているか (%)					
			意識している	やや意識している	あまり意識しない	意識しない	無回答	
全 体 (カッコ内は標本数)		100.0 (1,711)	27.2 (465)	22.2 (380)	36.2 (619)	13.6 (232)	0.9 (15)	
愛 久 着 留 の 米 有 市 無 へ 別 の	愛着がある	680	36.0	21.2	33.8	7.9	1.0	57.2
	どちらかといえば愛着がある	640	24.1	26.3	37.0	11.9	0.8	50.4
	どちらでもない	267	12.7	18.7	41.9	25.8	0.7	31.4
	どちらかといえば愛着がない	55	27.3	20.0	36.4	16.4	-	47.3
	愛着がない	49	18.4	12.2	24.5	44.9	-	30.6
無回答		20	40.0	5.0	40.0	10.0	5.0	45.0
心 食 の 育 有 へ 無 の 別 関	関心がある	610	50.0	20.7	23.4	5.6	0.3	70.7
	やや関心がある	590	20.5	30.5	40.3	8.5	0.2	51.0
	あまり関心はない	320	6.6	17.2	55.6	20.3	0.3	23.8
	関心はない	166	8.4	9.0	30.7	50.0	1.8	17.4
	無回答	25	16.0	16.0	36.0	-	32.0	32.0

■図2-4 性別・年齢別にみた地産地消に対する意識

◇ 男女ともに年齢が上がるほど意識している割合が高くなる傾向にあり、特に女性の 60 歳以上では7割を超えている。

◇ いずれの年代も男性より女性の意識が高い。特に 40・50 歳代でその差が大きい。

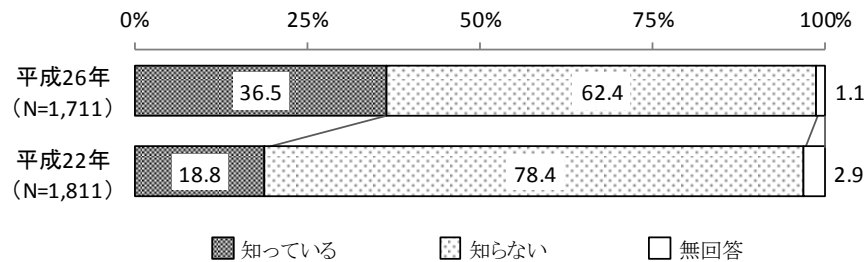


２－５ 久留米市地産地消推進店について

（１）久留米市地産地消推進店の認知

「久留米市地産地消推進店」の認知度は36.5%。
認知度は前回調査よりほぼ倍増した。

問 16 あなたは、「久留米市地産地消推進店」を知っていますか。（あてはまる番号に1つだけ○印）



◆属性別特徴

【性別】認知度は女性 43.4%、男性 28.5%と性別による差が大きい。

【年齢別】認知度は20歳代で21.3%と最も低く、年齢が上がるほど認知度も高くなる傾向にあり、70歳以上で48.3%と最も高くなっている。

【ブロック別】認知度は南西部(42.8%)、北部A(42.3%)、中央部(40.6%)で4割を超えている。一方、東部Bでは28.4%と認知度は最も低い。

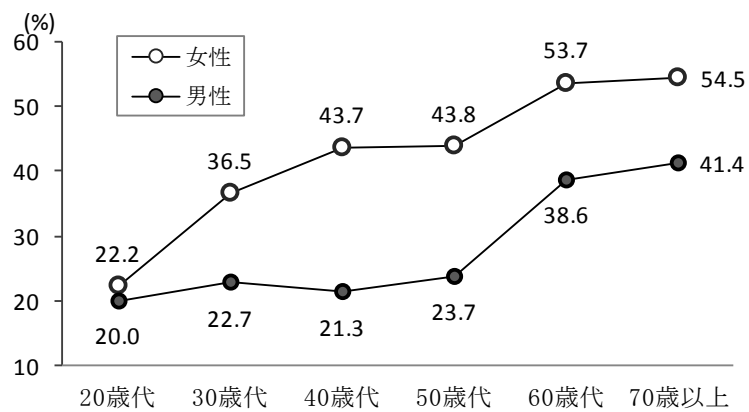
	標本数 (票)	久留米市地産地消推進店の認知度 (%)		
		知っている	知らない	無回答
全体 (カッコ内は標本数)	100.0 (1,711)	36.5 (625)	62.4 (1,068)	1.1 (18)
性別				
男性	786	28.5	70.9	0.6
女性	925	43.4	55.2	1.4
年齢別				
20歳代	202	21.3	78.2	0.5
30歳代	280	30.0	69.6	0.4
40歳代	324	33.3	66.0	0.6
50歳代	300	35.0	64.7	0.3
60歳代	394	46.4	51.0	2.5
70歳以上	211	48.3	50.2	1.4
ブロック別				
東部A	122	36.1	63.1	0.8
東部B(田主丸)	109	28.4	70.6	0.9
北部A	156	42.3	56.4	1.3
北部B(北野)	107	35.5	62.6	1.9
中央東部	210	39.0	60.5	0.5
南東部	176	34.1	64.2	1.7
中央部	229	40.6	58.5	0.9
中央南部	293	32.4	66.6	1.0
南西部	145	42.8	56.6	0.7
西部A(城島)	68	32.4	67.6	-
西部B(三潴)	96	33.3	64.6	2.1



■図2-5 性別・年齢別にみた「久留米地産地消推進店」の認知度

◇ 60歳以上の女性で認知度が5割を超えて高い。

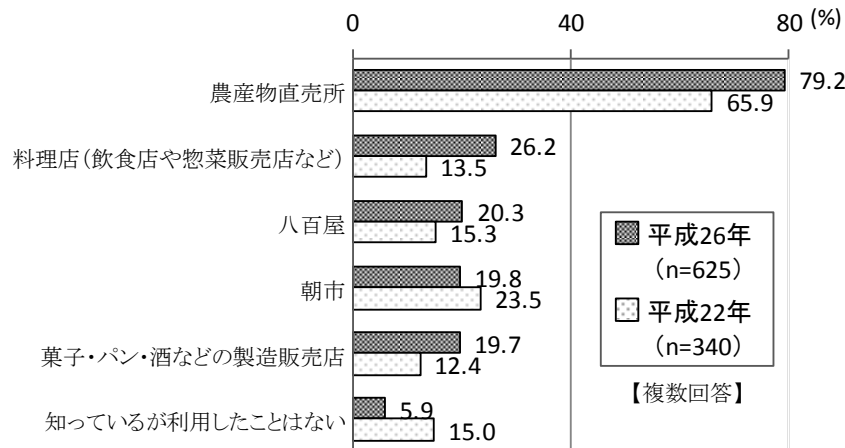
◇ いずれの年代も女性の認知度が高い。特に40・50歳代では20ポイント以上と性別による差が大きい。



(2) 利用したことがある久留米市地産地消推進店

利用したことがある久留米市地産地消推進店は「農産物直売所」が約8割で1位。

問 16 付問 問 16 で「1. 知っている」と回答した人に 利用したことがある久留米市地産地消推進店を教えてください。(あてはまる番号にいくつでも○印)



◆属性別特徴

【性別】「農産物直売所」は女性の利用が多く、「朝市」は男性の利用が多い。

【年齢別】「農産物直売所」を利用した人は 60・40 歳代に多くみられ、「料理店」は 30 歳代以下の若い年齢層で多い。また、70 歳以上では「八百屋」や「朝市」の利用が多くなっている。

【ブロック別】

- ・「農産物直売所」は東部Bでは9割を超える人が利用しているが、中央部では6割台にとどまっている。
- ・「料理店」の利用は北部A、「八百屋」は中央部や中央南部、「朝市」は中央部や北部A、「菓子・パン・酒などの製造販売店」は西部Bや東部Bに多くみられる。

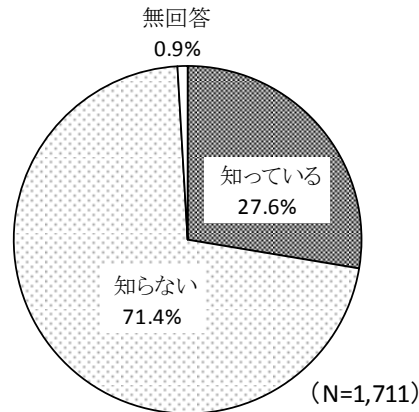
	標本数 (票)	利用したことがある久留米市地産地消推進店 (%)							無回答
		八百屋	農産物直売所	朝市	菓子・パン・酒などの製造販売店	料理店(惣菜・飲食店など)	は利用していない	知っているが利用したことはない	
全 体 (カッコ内は標本数)	100.0 (625)	20.3 (127)	79.2 (495)	19.8 (124)	19.7 (123)	26.2 (164)	5.9 (37)	0.3 (2)	
性別									
男性	224	21.0	75.4	21.9	17.4	28.1	5.8	0.4	
女性	401	20.0	81.3	18.7	20.9	25.2	6.0	0.2	
年齢別									
20歳代	43	14.0	53.5	9.3	18.6	37.2	16.3	-	
30歳代	84	22.6	71.4	16.7	23.8	33.3	4.8	-	
40歳代	108	15.7	84.3	18.5	21.3	29.6	3.7	1.9	
50歳代	105	17.1	81.9	15.2	16.2	29.5	6.7	-	
60歳代	183	19.1	86.3	24.0	20.2	23.5	3.8	-	
70歳以上	102	31.4	75.5	25.5	17.6	13.7	7.8	-	
ブロック別									
東部A	44	6.8	88.6	6.8	4.5	20.5	6.8	-	
東部B(田主丸)	31	9.7	93.5	16.1	29.0	12.9	-	-	
北部A	66	16.7	80.3	27.3	21.2	37.9	4.5	-	
北部B(北野)	38	7.9	78.9	18.4	13.2	18.4	10.5	-	
中央東部	82	20.7	85.4	12.2	12.2	28.0	3.7	-	
南東部	60	21.7	81.7	23.3	13.3	20.0	5.0	1.7	
中央部	93	31.2	67.7	29.0	17.2	32.3	7.5	1.1	
中央南部	95	29.5	71.6	18.9	27.4	30.5	5.3	-	
南西部	62	21.0	79.0	22.6	27.4	19.4	9.7	-	
西部A(城島)	22	22.7	81.8	9.1	27.3	18.2	9.1	-	
西部B(三瀬)	32	6.3	84.4	18.8	31.3	28.1	3.1	-	

2-6 県内最大の農業生産都市であることの認知

久留米市が県内最大の農業生産都市であることの認知度は27.6%。

問17 あなたは、久留米市が県内最大の農業生産都市であること知っていますか。

(あてはまる番号に1つだけ○印)



◆属性別特徴

【年齢別】認知度は20歳代で僅か7.4%と低く、年齢が上がるほど認知度も高くなる傾向にあり、70歳以上で約5割となっている。

【ブロック別】認知度は北部Bで唯一4割を超えており、西部A、東部A、東部Bでも3割台と高いが、中央南部と南東部では約2割と低い。

【職業別】認知度は農林漁業で60.9%と最も高く、給与所得者とパート・アルバイトで約2割となっており、学生で11.4%と最も低い。

【久留米市への愛着の有無別】久留米市への愛着度が高いほど認知度も高い傾向にある。

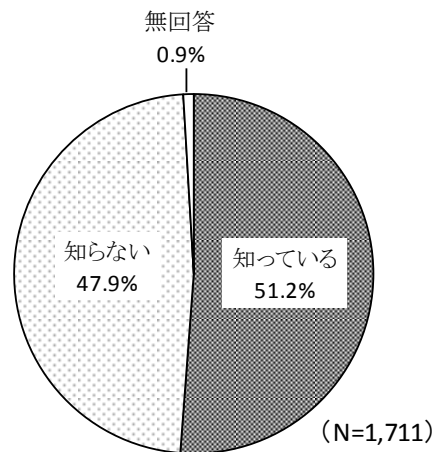
		標 本 数 （ 票 ）	久留米市が県内最大の農業生産 都市であることの認知（％）				標 本 数 （ 票 ）	久留米市が県内最大の農業生産 都市であることの認知（％）			
			知 っ て い る	知 ら な い	無 回 答			知 っ て い る	知 ら な い	無 回 答	
全 体 （カッコ内は標本数）		100.0 （ 1,711）	27.6 （ 473）	71.4 （ 1,222）	0.9 （ 16）	全 体 （カッコ内は標本数）		100.0 （ 1,711）	27.6 （ 473）	71.4 （ 1,222）	0.9 （ 16）
性 別	男性	786	28.4	70.7	0.9	職 業 別	農林漁業	46	60.9	37.0	2.2
	女性	925	27.0	72.0	1.0		自営業	163	33.1	65.0	1.8
年 齢 別	20歳代	202	7.4	92.6	－		給与所得者（常勤）	658	21.6	78.0	0.5
	30歳代	280	15.4	84.3	0.4		パート・アルバイト（学生は除く）	260	20.4	78.8	0.8
	40歳代	324	21.0	78.4	0.6		学生	35	11.4	88.6	－
	50歳代	300	27.7	72.0	0.3		家事に専念	205	33.7	64.9	1.5
	60歳代	394	40.9	57.6	1.5		無職	325	36.6	62.2	1.2
	70歳以上	211	48.8	48.3	2.8		その他	12	25.0	75.0	－
ブ ロ ッ ク 別	東部A	122	32.8	67.2	－	無回答	7	14.3	85.7	－	
	東部B（田主丸）	109	30.3	67.0	2.8	愛 着 の 有 無 別	久留米市へ	680	32.5	66.8	0.7
	北部A	156	29.5	69.9	0.6		愛着がある	640	27.5	71.6	0.9
	北部B（北野）	107	42.1	57.0	0.9		どちらかといえば愛着がある	267	18.7	80.1	1.1
	中央東部	210	27.1	71.4	1.4		どちらかといえば愛着がない	55	27.3	72.7	－
	南東部	176	22.2	77.3	0.6		愛着がない	49	14.3	85.7	－
	中央部	229	27.9	71.6	0.4		無回答	20	20.0	70.0	10.0
	中央南部	293	20.1	78.8	1.0						
	南西部	145	26.2	73.8	－						
	西部A（城島）	68	35.3	64.7	－						
西部B（三潴）	96	29.2	67.7	3.1							

２－７ 田んぼや畑の多面的機能

（１）多面的機能の認知

田んぼや畑の多面的機能の認知度は 51.2%。
男性の認知度は 56.9%で、女性より 10.5 ポイント高い。

問 18 田んぼや畑には、洪水を防止する、暑さをやわらげる、多くの生物を育むなどの多面的機能があることを知っていますか。（あてはまる番号に 1 つだけ○印）



◆属性別特徴

【性別】認知度は男性 56.9%、女性 46.4%で、男性の認知度が 10.5 ポイント高い。

【年齢別】認知度は 30 歳代以下で約4割と低く、年齢が上がるほど認知度も高くなる傾向にあり、60 歳代で 57.9%と最も高くなっている。

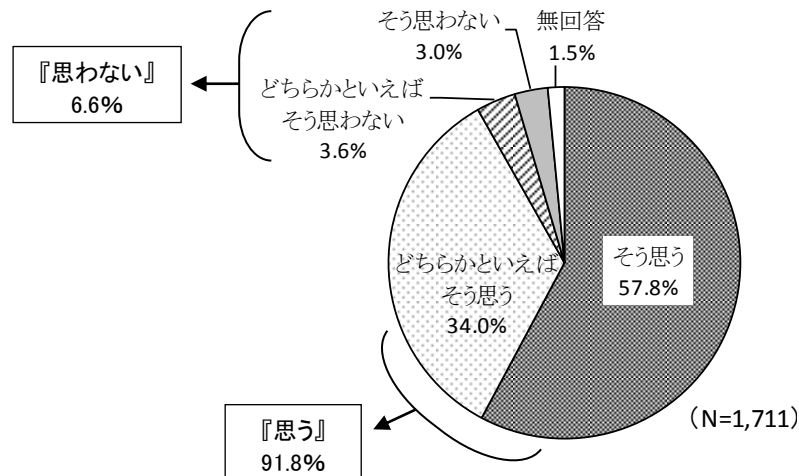
【ブロック別】認知度は北部Bと南西部で6割を超えているが、中央東部と中央南部では4割半ばにとどまる。

		標 本 数 (票)	田畑の多面的機能の認知（％）		
			知 っ て い る	知 ら な い	無 回 答
全 体 (カッコ内は標本数)		100.0 (1,711)	51.2 (876)	47.9 (819)	0.9 (16)
性 別	男性	786	56.9	42.6	0.5
	女性	925	46.4	52.3	1.3
年 齢 別	20歳代	202	42.6	57.4	-
	30歳代	280	43.6	55.7	0.7
	40歳代	324	50.0	49.4	0.6
	50歳代	300	52.7	47.0	0.3
	60歳代	394	57.9	40.1	2.0
	70歳以上	211	56.9	41.7	1.4
ブ ロ ッ ク 別	東部A	122	54.1	45.1	0.8
	東部B(田主丸)	109	52.3	45.9	1.8
	北部A	156	48.1	50.6	1.3
	北部B(北野)	107	61.7	38.3	-
	中央東部	210	45.2	53.8	1.0
	南東部	176	50.6	48.9	0.6
	中央部	229	49.8	49.8	0.4
	中央南部	293	45.4	53.2	1.4
	南西部	145	61.4	37.9	0.7
	西部A(城島)	68	58.8	41.2	-
	西部B(三瀧)	96	54.2	43.8	2.1

(2) 多面的機能を維持・保全する取り組みの重要性

約9割の人が多面的機能を維持・保全するための政策に取り組むことを重要だと感じている。

問 19 久留米市が、これらの多面的機能を維持・保全するための政策に取り組むことは重要だと思いますか。(あてはまる番号に1つだけ○印)



◆属性別特徴

【性別】「そう思う」は女性が男性より5.7ポイント高い。

【年齢別】60歳以上で「そう思う」が6割を超えて高い。

【ブロック別】

・北部Bは「そう思う」が66.4%と、他のブロックと比較して最も高い。

・南東部では『思わない』が唯一1割を超えて他のブロックより高い。

	標本数 (票)	多面的機能を維持・保全することは重要か (%)						
		そう 思う	えど ばち そら うか 思と うい	なえど いばち そら うか 思と わい	そう 思わ ない	無 回 答	『 思 う 』	『 思 わ ない 』
全 体 (カッコ内は標本数)	100.0 (1,711)	57.8 (989)	34.0 (582)	3.6 (62)	3.0 (52)	1.5 (26)	91.8 (1,571)	6.6 (114)
性 別								
男性	786	54.7	35.8	4.6	3.8	1.1	90.5	8.4
女性	925	60.4	32.5	2.8	2.4	1.8	92.9	5.2
年 齢 別								
20歳代	202	54.0	35.1	4.0	6.4	0.5	89.1	10.4
30歳代	280	54.6	37.1	4.3	3.2	0.7	91.7	7.5
40歳代	324	52.8	41.0	2.8	2.2	1.2	93.8	5.0
50歳代	300	58.3	32.7	3.7	4.7	0.7	91.0	8.4
60歳代	394	63.5	28.4	3.8	1.5	2.8	91.9	5.3
70歳以上	211	62.1	30.3	3.3	1.4	2.8	92.4	4.7
ブ ロ ッ ク 別								
東部A	122	59.0	33.6	4.1	1.6	1.6	92.6	5.7
東部B(田主丸)	109	62.4	26.6	4.6	4.6	1.8	89.0	9.2
北部A	156	57.7	31.4	3.8	5.1	1.9	89.1	8.9
北部B(北野)	107	66.4	28.0	0.9	4.7	-	94.4	5.6
中央東部	210	54.8	36.7	5.2	1.0	2.4	91.5	6.2
南東部	176	55.7	30.1	4.5	7.4	2.3	85.8	11.9
中央部	229	61.1	34.1	2.6	1.3	0.9	95.2	3.9
中央南部	293	53.2	38.6	3.1	3.4	1.7	91.8	6.5
南西部	145	60.7	35.9	2.1	1.4	-	96.6	3.5
西部A(城島)	68	55.9	36.8	5.9	-	1.5	92.7	5.9
西部B(三瀬)	96	55.2	36.5	4.2	2.1	2.1	91.7	6.3

考 察 — 食育・地産地消 —

●食育から、食に関する学習へ

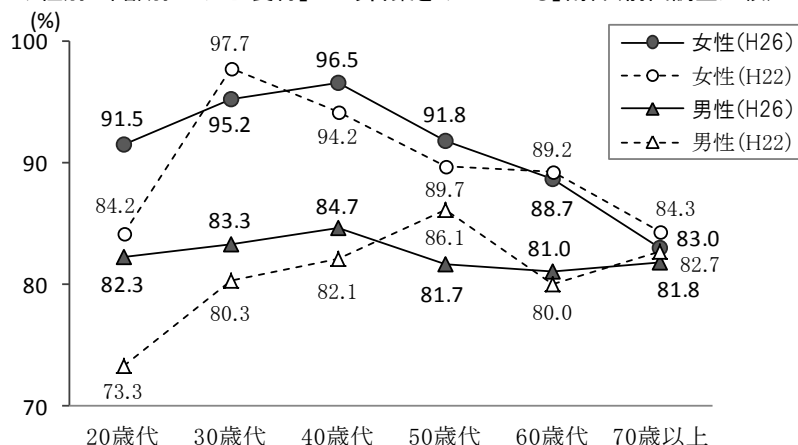
4年前の調査と比較すると、「食育」という言葉や意味の認知、関心の高まりがみられる。健康的な生活における食の重要性への理解が進んでおり、「食育」に関する啓発活動が一定の成果を収めていると評価できる。特に、20歳代における認知度の急上昇は特筆すべき動きであり、これは平成18年度「食育都市宣言」、平成19年度からの「久留米市食育推進プラン」に基づく、学校教育の中での「食育」への取り組みが実を結んだ結果であると考えられる。

しかしながら、50歳以上の中高年層での認知は横ばい、低減の傾向がみられる。60歳代以上の高齢者層においては、「言葉は知っているが意味は知らない」との回答が3割を超えている。つまり、3人に1人の高齢者が、「食育って、いったい何だろう」と思いながら生活している。一方、「食育」に対する関心の高さの世代間差は小さい。平均余命が益々伸びていく中、「食」を通じた健康づくりについて学びたいと考える高齢者は増えてきているが、「食育」に接する機会が少ないために、関心はあるが学べない現状があるのではないか。

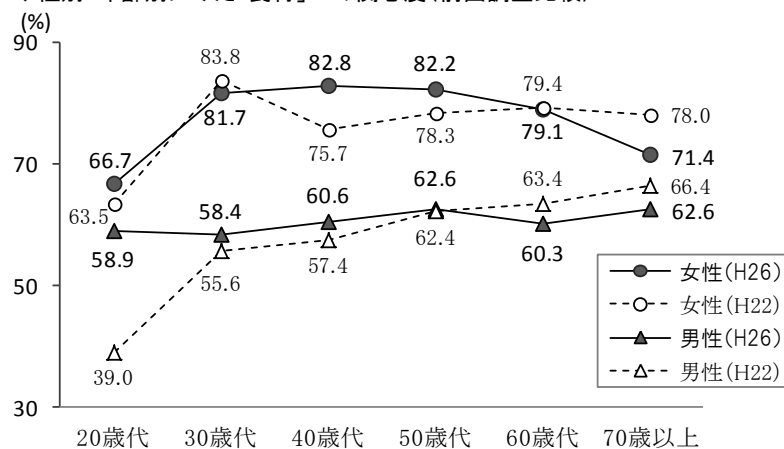
高齢化が急速に進む中、高齢者が自ら健康的な食生活を実践していく重要性は、益々大きくなってきている。そもそも、食育基本法では、「食育を、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けるとともに、さまざまな経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することが求められている」としている。「人間を育てる」教育という思想のもとに規定され、啓発活動も設計されてきた。しかし、高齢者のようなさまざまな経験を積んできた層には、学校教育や子育て世代に行われているような、食に関する新しい知識や技術を教え伝えるような「教育的アプローチ」ではなく、長年実施してきた食生活を振り返り、これからの食の在り方を自ら考えて学んでいけるような、「学習的アプローチ」が有効であると考えられる。

中高年向けには、「食育」という言葉をあえて使わず、例えば「食に関する学習＝食習」という新概念を導入する等の方法も検討してみてもどうか。「食習」という言葉が適当かどうか

◆性別・年齢別にみた「食育」という言葉を「知っている」割合(前回調査比較)



◆性別・年齢別にみた「食育」への関心度(前回調査比較)



かは別途慎重な議論が必要だが（食事習慣という言葉で民俗学的に用いられた形跡はあるが、食習という言葉は一般的にはこれまでほとんど用いられていない）、高齢者層に訴求できるような言葉やプログラムの提示が求められている。

●地産地消が私たちの生活を豊かにする、という意識を育み広げる

「久留米産の農産物を食べるように意識している」、つまり「地産地消を意識している」人の割合は、全体の半数に満たない。そして、「意識していない」人の割合を僅かであるが下回っている。これは、「農業生産都市・久留米」の産業振興・経済活動の活性を考えると、少々残念な結果であると言わざるを得ない。

「久留米産の農産物を食べるように意識している」人の割合は、久留米市への愛着がある層、食育への関心がある層で高い傾向がみられる。これらの層の特徴を他のクロス分析も加えて推察すると、「久留米に長年住んでいる」「高齢者」「子育て世代」層において「地産地消」への積極的な取り組み姿勢がみられるが、おそらく「食育への関心が高い子育て層」は「地産地消」というよりも「安心安全のために、産地がはっきりしている新鮮な農作物を食べるようにしている」という意識に基づく

行動が多いと考えられる。一方、「久留米に長年住んでいる比較的高齢の方々」は、「久留米が好きだから基幹産業である農業を応援したい、久留米の豊かな食生活を今後も守りたい」という気持ちが背景となっている可能性が高い。この「地産地消」に対する認識の差を認めただうえで、「農業生産都市・久留米」における「地産地消」の持つ意味を改めて問い直し、全市民に

問いかけていくことが大切ではないかと考える。

そのためにも、まず「久留米市が県内最大の農業生産都市である」ことの認知度を高めていく活動に重点的に取り組んでいくべきと考える。「地産地消」が、久留米の基幹産業である農業を支えていくことにつながり、雇用場が確保され、最終的には、久留米の産業活性化に寄与する。また、農業の多面的機能を維持することにもなる。「地産地消」は、個々の健康や、農家の経営安定のための施策ではなく、農業を基幹産業とする久留米においては、より広い意味での市政安定、市民生活の豊かさ実現に寄与する施策であることの周知、理解浸透を図っていく活動が求められる。

●「農業生産都市・久留米」を「住みやすさ」から理解する

「久留米は県下有数の農業生産都市です、農業がとても盛んです」と、いくら声を大にして

◆年齢別、居住年数別にみた地産地消に対する意識

	標本数 (票)	久留米産の農産物を食べるように意識しているか (%)						
		意識している	やや意識している	まあいい意識	ない意識	無回答	「意識している」	「意識していない」
全 体 (カッコ内は標本数)	100.0 (1,711)	27.2 (465)	22.2 (380)	36.2 (619)	13.6 (232)	0.9 (15)	49.4 (845)	49.8 (851)
年 齢 別								
20歳代	202	10.9	10.9	45.0	32.2	1.0	21.8	77.2
30歳代	280	17.9	21.8	41.8	18.2	0.4	39.7	60.0
40歳代	324	24.1	23.5	40.7	11.4	0.3	47.6	52.1
50歳代	300	28.7	20.3	39.3	11.0	0.7	49.0	50.3
60歳代	394	35.5	26.9	28.7	7.6	1.3	62.4	36.3
70歳以上	211	42.2	25.6	22.7	7.6	1.9	67.8	30.3
居 住 年 数 別								
5年未満	140	22.1	17.9	35.0	24.3	0.7	40.0	59.3
5～10年未満	108	22.2	27.8	40.7	8.3	0.9	50.0	49.0
10～20年未満	275	21.1	19.3	41.5	17.8	0.4	40.4	59.3
20～30年未満	307	21.5	19.9	41.4	17.3	-	41.4	58.7
30～40年未満	292	28.8	25.0	32.5	13.0	0.7	53.8	45.5
40年以上	582	34.4	23.4	32.1	8.4	1.7	57.8	40.5
無回答	7	28.6	28.6	42.9	-	-	57.2	42.9

アピールしても、多くの人には「そうなのね、そういえば地元の野菜が良く売られているな」程度の認識にしかつながらない、かえって「自分の生活と農業は関係ない」と感じる都市型生活志向の人もあるかもしれない。ここは、もうちょっと戦略的かつ間接的な周知・理解浸透戦略を検討し、効果的に展開していく努力が必要であろう。

例えば、多くの人が共感できる「住みやすさ」と紐づけて、また自らの目で納得できる「可視できるイメージ」とセットにして、「農業生産都市」の情報を提供していく具体的な方策を考えてみてはどうだろうか。

「緑や自然が多い」は、「久留米市が住みやすい理由」で最も多かったトップ項目であり、5割の支持を集めた。久留米市は「住みやすさ」をアピールするとき、この「緑や自然が多い」というデータを根拠として示す機会も多いと思う。その際、「夏の稲」「冬の野菜」「果物」や「植木苗木」、という情報を強調していくことを提案したい。

このように、久留米は、「農業の多面的な機能によって緑と自然の恵みを維持してきている」ということを、「住みやすさ」の背景として、しっかり印象付けていくことが大切だと考える。そして、都市部と農村・田園部の良さがバランスよく発揮されている人口 30 万の中核市として、生活の魅力を広く強くアピールしていくべきと考える。

(分析者 山下永子)